論語の文法

Syntactic stractures of Confucius' "Lun Yü"

高橋君平

凡例

論語については飜訳・解説・研究などが山ほどあるから、その山に更に一箕の土を重ねるつもりはない。ここでは先学がまだ手をつけていないと思われる文法をとりあげて見たい。

一　岩波文庫、金谷治訳注の論語をアキストとする。

二、太字の数は篇次を、その下の数で章次を表わす。

一学而　**二**為政　**三**八佾　**四**里仁　**五**公冶長　**六**雍也　**七**述而　**八**泰伯　**九**子罕　**十**郷党　**十一**先進　**十二**顔淵　**十三**子路　**十四**憲問　**十五**衛霊公　**十六**季氏　**十七**陽貨　**十八**微子　**十九**子張　**二十**堯曰

三、「　」内は原文にはないのだが理解を容易にするために仮に補充したもの。

四、＝符は主語と述語を分け、―符は述語の中で動詞又は系詞と賓語を分ける

～符は、動詞の前は状語（連用語）、後は補語。

五、重複を避けるために、初めから符号をつけて原文を引くことがある。

六　文法は本来 generative（生成性）なものだから例文は一二を挙げるに止める。他は類推に従う。

曰　有朋　不亦〜乎

一―1　子曰わく「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや、朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや、人知らずして慍みず、亦た君子ならずや。」

曰は他動詞「　」内の三句がその賓語。こういう長い語を賓語にとる動詞を、名詞を賓語にとる普通の他動詞と区別して情意動詞という。孔子が「　」と言ったというのだが、漢文では、一般に前に曰ク〜と言えば、後では必ずしも「　」トを送らない。

論語に最もよく現われる情意動詞は、曰ク、謂イイラク、オモイラク、問フ、知ル、など。

「他動詞が賓語を伴う述語」の句を動賓構造というが、これは最もありふれた表現形態で最もよく用いられる。主語＝他動詞―賓語

○有朋自遠方来　朋有リ遠方ヨリ来タル（無主の遞述句）

有（友）朋、遠方より来たる
友、遠方より来たる有り　　ともに合法の読ではない。

〔何処かに＝〕有―朋＝自遠方〜来。朋＝来。（遞述構造）

朋＝…来（主動構造…述語が自動詞）

朋、は前動詞「有」の賓語であると同時に後動詞「来」の主語を兼ねるから兼語という。どこか或は遠方に友人がおり、その友人がやって来る。自、は介詞、遠方はその賓語、合わせて介賓状語…自／遠方〜

兼語のあるものはすべて遞述構造といい、「有」で始まる句はすべて無主の遞述句で、古今よく用いられる。いま主語は場処であるが、その場処はどこでもいいので指定する必要がないか、指定し難いとき、又は自

明のときは略すのが通例である。この句は主語であるべき処所を欠くから遁述構造の無主形という。主語を欠けば、「有」動詞はそれにつづく名詞（いま朋）の存在を確認強調するに止まる。

十一―22　子曰有ニ父兄一在マス〔家＝〕有―父兄＝在…父兄（今の日本語と同じ）有リテ在マス「父兄在ます有り」と読むのも合法でない。

六―3　…孔子対曰有ニ顔回ルナ者一好学…不幸短命死矣…〔我們这里＝〕有―顔回者＝…顔回という人物の存在を確認する。

○有牽牛而過堂下者（孟、梁恵）…無主の処動構造

○有大人者、正己…（同尽心上）…前句は無主の処動句

○有王者起、必来取法（同滕上）…無主の遁述構造

○有這麽個老頭児＝家里：很富…（倉石二59）

〔あるところに〕こういう老人（兼語）がいた、その家はたいへん金持であった―ある所にたいへん金持ちの老人があつた。

十一―25…子路曰有民人焉、有社稷焉

これは後述語はないから遁述構造ではなく、無主の処動構造である。述語は動賓結構だが、主語は処所のものは処動構造という。

〔国家＝〕有―民人焉…〔国〕には人民がおり、社稷がある。焉は句末語気、語調を整えるだけで意味はない。

有、動詞はよく処動構造に用いられるが、その無主形は、みな遁述構造の前述語であることは前掲例文で見る通りである。

○不亦説（楽・君子）乎。亦た説ばしからずやーよろこばしい事ではないかーしたいへん愉快なことだ（反詰は疑問形態を借りる）。好んで反詰形を用いるのは漢文の一つの特色。

平叙なら亦不…だが（例一―12有子…知和而和、不以礼節之、亦不可行也）、疑問や反語では語順が逆になり、句末に語気「乎」をつけるのが通例。○この亦は語調を整えるための音詞でモマタの意味はない。

六―2　居―敬而行―簡、以臨―其民（三述とも動賓句）、不亦可乎

八―7　曾子曰…任重而道遠、仁以為ニ己任一、不ニ亦タ重一カラ乎、死而後已、不ニ亦タ遠一カラ乎　…亦た遠からずや

十九―23　夫子之云、不亦宜乎

漢文では反詰述語は疑問形態を借りるが、それが質問が疑惑が反詰かは、前後文を読みつげば誰にもすぐわかる。反語には大抵否定詞（不）がつく。

不亦～乎の亦は音調詞で意味は無いが、モマタの意味をもつ時もある、例えば

五―25　子曰巧言令色足恭―左丘明＝恥レ之ヲ、丘モ亦マタ恥レ之、匿シテ―怨ヲ友トス―其ノ人ヲ―左丘明＝恥―之、丘モ亦マタ恥之。左丘明と同様に丘モマタ　之（巧言令色足恭を復指する代詞賓語）

文体　開巻第一章には「不亦～乎」という反語形が重疊する。反語が多いということと、同一述語を三回繰返えすという文体は論語を通じてよく散見する。こういう手法は恐らく日本語にはない。

謂

㈠　謂　他動詞―情意動詞　イフ、イイラク

子曰ヶと同義の動詞だが、曰の賓語は口頭で言ったコトバそのものであり、謂は「　」という意味のことを言った、のである。曰をイワクというのに対して謂はイイラクと読む、または曰は口頭で言ったのに対して、謂

は心の中で言ったのであるからオモイラク（以為―想―）と訓じもいい。この謂はよく用いられるが、注疏も訓読も誤るものが少なくない。

三―1　孔子謂、季氏八佾舞二於庭一…

子曰ク「学びて時に…」と同様に、これは、孔子謂（イイラク／オモイラク）「季氏は八佾を庭に舞わす」と読むべきものである。その意は「孔子は次のような意味のことを謂われた」（又は次のように考えられた「季氏は八列の舞を、自分の廟で舞わせたが、これはがまんのできない非礼である」孔子＝謂ラク、「季氏…」（読点に注意）

三―25　子謂ラク、韶ハ盡ク美ナリ矣、又盡ク善也。謂ラク、武ハ盡美矣、未ダ盡ク善一ラ也。孔子は謂われた「……」と。子＝謂、「韶＝盡美矣…、」

未は過去又は現在完了の否定詞で、不が現在、未来を否定するのと異る。イマダ～ズと再読するのは、不・無・非などと区別するため。

五―1　子謂ラク、公冶長ハ可妻也…孔子は「公冶長はよき婿さんである……」と謂われて（考えられて）、自分の娘を嫁にやった。子＝謂、「公冶長＝可妻也…」

五―2　子謂ラク、南容ハ邦ニ有レバ道不レ廃セラレ…

孔子は「南容という青年は…」と謂われて（考えられて）自分の兄の娘をめあわせた。

五―3　子謂、「子賤ハ君子哉、若人、…」。

「子賤といふのは、なかなか立派な人物だね、この人は」と謂われた。若人―這〔様〕人

五―16　子謂、子産ニハ＝有―君子之道四焉

孔子は謂われた「子産には君子の道が四つある」

十三―8　子謂ラク、衛霊公荆ハ…

以上の一類を中国では古来「孔子謂季氏、…孔子謂韶、…子謂公冶長、…子謂南容、…」で句切り、現代中国の陳濬、楊伯峻も同様に「孔子談到季子説：…孔子説公冶長這個人、「可妻也。…」孔子評論子賤、説：と訓じ、日本もその訓点に従って、孔子季子を謂わく…、公冶長を謂わく…、子、南容を謂わく…、と訓読するのは、梁皇侃の疏「謂者、評論之辞」也に誤られたものと考えられる。

史記太史公自序には「…遷生龍門、耕牧河山文陽、年十歳則誦古文…」とあるし、皇侃と同時代と思われる北斉の顔之推が「幼少時に暗誦した霊光殿賦は〔六十を越した〕今でも憶えている」（顔氏家訓）といっていることから察すると、昔から読書人は幼少から古典の素読をしたものらしい。宋以後は論語を首とする四書は必読のテキストであったにちがいない。素読は充分に意味を解しないままに暗誦するものだから必ず語調を整えなければならない。例えば「箱根の山は天下の険、函谷関もものならず、万丈の山千仞の谷…」と歌になれば歌詞の意味は解らなくとも五六才の幼童もすぐに暗誦できる。

論語は曰語で埋っているが、子曰レク学ヲ、而シテ…とは読めぬから、曰語はすべて曰で一頓し、

子曰ク、学而時習之…　有子曰ク、其為人也…

子曰ク、巧言令色…　子曰、甯武子ハ…

子曰、晏平仲ハ…

と読むが、謂語の方は

孔子謂、季子ハ八佾舞於庭（3字と7字）

子謂、南容ハ邦有道不廃（2字と7字）

で句切ったのでは誦読に適しない。そこで

孔子謂季子、八佾舞於庭（5字と5字）

子謂韶、盡美矣（3字と3字）
子謂南容、邦有道不廢（4字と5字）

と誦読し易いように句読が自然に崩れ、謂語は次の名詞まで一気に読むことに固定してしまったものと思われる。

恐らく皇侃自身幼時から、この読み方を習っていたので、今度はその句読に即して解釈すれば、謂者評論之辞とならざるを得ない。がこの謂は曰と同等の他動詞であり、どんな場合にも「評論する」意味はないし、句読は語調の関係で、必ずしも文法と一致しないこともあり得る。しかし文法が句読を定めるのであり、その逆―句調が文法を定めることは有り得ない。それからどんな句でも、主語のないものはない。主語と述語がそろって始めて意味がまとまる。「盡美矣」とか「可妻也」「邦有道不廃」だけでは句は成り立たないコトバにならない、必ず主語がいる。韶が盡美なのであり、公冶長が可妻なのであり、季氏が～を舞わしたのであり、南容が～廃せられないのである。だから、季氏、韶、公冶長、南容はその後につづく述語の主語であり、述語と切り離すことは絶対に許されない。必ず子謂、で句切るべきものである。商務印書館の「辞源」が「謂」の義解に「評論之辞」をとり入れているのも皇疏に誤まられたもので、採ることはできない。

古典の解釈には、古来、個人の主観による「望文生義」―文法に合わない誤った解釈―が少なくないから注意を要する。注疏は常に正しい、辞書は常に正しいという先入観は棄て去るべきである。

六―8　…子曰ク…不辱其身者伯夷叔斉与。謂ラク柳下恵少連ハ降志辱身矣。謂ラク虞仲夷逸ハ…

この2謂も前同様「謂ラク」と読むべきであろう。

上掲諸例の謂は、みな曰字に替えることができる、ただ替えれば、口頭で言ったコトバそれ自体ということになるけど。

㈡ 謂　双賓の系詞　動賓構造　…ヲ…ト謂フ

五―15　子貢問曰、孔文子何ヲ以テ謂フ之ヲ文ト也ヤ。

子曰、敏而好学、不恥下問、是以テ謂フ之ヲ文ト　謂―之ヲ（前賓―ひと、孔文子を復指する代詞）

文ト（後賓―事・物）

五―24　子曰、孰カ＝謂フ―微生高ヲ（前賓―ひと）

直ナリト（後賓―事物）

之と文と同格、微生高と直〔なる人〕と同格

一―7　子夏曰賢賢易色、事父母竭其力…言而有信、雖曰未学、吾必謂ハン之ヲ学ビタリト矣

三―15　孰カ＝謂フ―鄹人之子ヲ知ルト―礼ヲ乎

二十―4　…子曰不教而殺、謂フ―之ヲ（「不教而殺」を復指する）

虐ト

左伝襄公31年に「仲尼聞是語也、曰以是観之、人＝謂フモ―子産ヲ・不仁ト、吾不信矣。」とあり、謂の双賓活用例は古文に少なくない。また論語十六―12に「斉景公有馬千駟…其レ斯コレ之コレ謂フ与ヲ」の語がある。謂ニ―之ヲ・斯ト では文にならないから、斯を動詞の前に倒置して強調し、その印に助詞「之」を添加した形と解釈される。「斯のことをこそ(之)そう謂うのであろうか。」其、は軽い疑惑を表わす副詞であろう。「之謂」形は論語には少ないが、孟子・中庸・其他の古文には常見する。謂之、之謂、の文法は拙「漢語形体文法論」114頁に詳しい。

㈢ 謂テ～ニ曰ク　語カタリテ～ニ曰　現代語「告訴ソウ～説イウ」に相当。

二―21　或ルヒト謂イテ孔子ニ曰ク　孔子に告げて曰った：

(イ)　ある人が孔子に向っていった（金谷）

(ロ)　有人対孔子道（楊伯峻）

謂には「評論する」意味も「に向って」という意味もないが、文法がわかっていれば、「謂って曰った」では「イフ」が重複するから、意訳語として(イ)(ロ)を受用していいだろう。

三―6　…子謂イテ冉有ニ曰ク

(イ)　先生が冉有に向って（金）

(ロ)　孔子対冉有説道（楊）

六―13　子謂イテ子夏ニ曰ク女為君子儒、無為小人儒。

(イ)　先生が子夏に向っていわれた

(ロ)　孔子対子夏道：

六―6　周公ニ謂イテ魯公ニ曰ク…　周公は魯公に次のように言った

(イ)　周公が魯公に向っていわれた

(ロ)　周公対魯公説道…

六―6　子謂イテ仲弓ニ曰オ犂牛之子…山川其舎諸。

(イ)　子、仲弓を謂いて曰く…(イ)先生は仲弓のことをこういわれた（金）

(ロ)　孔子談到冉雍説……（楊）冉有のことを評して…

以上5例ともみな「謂〔人名〕曰」で、構造は全く同じなのに第五例（六―6）だけを(イ)(ロ)とも「批評する」義に訳するのは自家矛盾ではないか。前4例と同じく「仲弓に謂いて曰く―仲弓に謂って聞かせた」と読解す

べきだろう。この5例の謂は勿論動詞だが、いま介詞に用いられており、次の2例の「語」と全く同格：

三―23　子語ヲ魯大師ニ・楽ヲ曰ク…

十三―18　葉公ニ語ヲ―孔子ニ曰ク

金容・楊伯峻とも「仲弓を謂って曰く」と訳すのは朱熹の集註が誤っているからである。集註「…然此論仲弓云爾、非与仲弓言也…これは仲弓のことを論じているので、仲弓に〔向って〕言っているのではない」に由るのであろう。

このことは文法の性格を端的に現わしているもののようである。㈠文法は自然発生的なもので言語とともに在る。㈡聖賢と雖も創造も変改もできない。㈢文法が generative であるとは、同一構造には同一訳語しか成り立たないということ。

或謂孔子曰　子謂冉有曰　子謂子夏曰　を「～に謂って曰く～…に向って曰く…」と読む以上は、子謂仲弓曰もまた当然「仲弓に謂って曰く」と読まねばならない。朱子と雖も、これだけを「仲弓を謂って曰く」と読むことは許されない。これが文法というものである。若し「仲弓のことを謂う」意味なら「子謂南容邦有道不廃…」と同じように「子謂仲弓犂牛之子…」と構文すべきであり、曰字を入れることはできない。また文義の上からも、孔子が仲弓に「犂牛の子は…」と言い聞かせた、と言う方が自然で理が通る。朱子のような碩学も往々解釈を誤るのは文法を講ぜず、自己の主観によるからであるが、昔は、文法論が無かったのだから己むを得ない。

其

其、は㈠指示定語として古今最もよく用いられ誰でも知っている：其ノ志　其ノ所　其ノ民　其ノ母　其ノ心

其ノ親　其ノ政　其ノ力　其ノ為人　其不善者　…など無数

㈡　指示主語としては：

十三―25　…及其ガ＝使―人也…　その人が人を使う時は…

十三―14　…子曰其ハ事也…それは事務であろう

十三―15　…如其善而莫之違也…其は如に後付する助詞で2字でモシと読む、指示主語ではない。

など少なくないし、（史記にも散見）（日本には其ソレ・其ソノ・2訓しかないので誤解を免かれぬ）

㈢　指示賓語としては六朝時代によく用いられたが、

論語にはそのほか、疑問副詞の用例が相当あり、最も難解のものとしては諸語に後付する助詞であるが、注疏は曽って其字の解釈をしない。ここでは其字の助詞用例をとりあげる。

㈠　与　其　（二字連続の介詞―ヨリハ　と読む）

三―4　…礼ハ与ヨリハ二其ノ奢ナラレ一寧ロ倹セヨ、喪与其易也寧戚

〔疏〕は「与猶等也、奢与倹易与戚等俱不合礼…」で、「其」に言及しないし、与猶等也も極めて難解。

―13　…与ヨリハ二其ノ媚ビヲ一於奥ニ寧ロ媚ビヨ二於灶ニ一　…与其…寧

七―35　…与ヨリハ二其ノ不遜ナラン一也寧ロ固ナレ。

九―12　…且予ハ与ヨリハ二其ノ死セン一於臣之手ニ無ムシロ寧ロ死於二三子之手乎…与其～無寧（無寧は寧の反語形か）

十六―6　…且而与ヨリハ二其ノ従ハン一辟人之士ニ也、豈アニ若シカンレ従フニ辟世之士ニ哉ヤ　…与其～豈若（反語形）

与、はもと①あたえる②とにする③くみする、ゆるす、意の他動詞であるが、～と、～に、の意の介詞にも用いられるので、それとはっきり区別するために、比較義を表わす介詞に限り「与其」と複音にしたものと思われる。この其には意味はないが、必ず与其と2字連読する。

漢文は文面に表われる文字は一字残らず全部読むべきものだから、訓読も、読みようのない矣・焉など句末の語気詞と、句中の於・乎などの虚字介詞を除き、できる限り読むように工夫すべきである。その意味から「与其」の其をソノと読みなすようになったものであろうが、「ソノ～ヨリハ」と読むと①ソノが主語又は定語に紛れる疑があるし、②与一字の介詞をヨリハと読むことは殆んど無いから与其2字複合の介詞だけをヨリハと読むことに定め、ソノという読みは削ってもいいのではないか。要するにこの其は介詞与に後付したる音詞であるから、与其と連読し、分離すべきでないということ。それから③この場合は必ず後句は、寧・無寧・豈若などで承けるということを注意したい。だから

七―28　互郷難与言…子曰ク与ニ其ノ進ニ也、不レ与ニ其退ニ也、唯何甚、人潔己以進、与ニ其潔ヤニ也、不レ保ニ其往ニ也

の4其はソノと読むが、実は指示代詞の主語で、与其と連続する介詞でないことは、前後文を読みつぐことにより誰にでもすぐわかる。所与の句の正解を得るためには漢文は必ず前後文を読みつがねばならない。

与其は現代語では「不如」で承ける：

与其写死文不如説活話（黎氏「国語文法」304）死んだ文を書くよりは活きた言葉を話すに如かず。

㈠　主語に後付する其

十三―14　…子曰其事也、如有政、雖ニ不吾ヲ以ニ、吾其与聞之。…吾其と連読する。わたしだって吾レ其ヽと訓読する外はないのだろう。口語なら「雖不用我」であろうが、賓語が代詞のときは否定詞と動詞の間に移すというのが文言文法の一つの特例レ雖不吾以。楊伯峻「雖然不用我了、我也会知道的。」

十四―18　…微管仲、吾其被髪左衽矣、わしらだって、楊「…假若没有管仲、我們都会披散着頭髪衣襟向左辺

開、「淪為夷狄」了。微、は実際にいた者が、いなかったと仮定すれば、の意。

漢文は単複を区別する方法がない。しかし口語ではそういう区別をしたにちがいない。曰語は、口語に近い、其音を付加することによりいろいろのニュアンスを表わしたものと思われる。—ワシらだって

八—1　泰伯其、可謂至徳也已矣　其は停頓助詞、泰伯という方は、至徳と言うべきですね。

—20　…周之徳其、可謂至徳也已矣　周の徳というのは…　泰伯其（ソレ）、周徳其、と連読する。

この両例の謂は系詞で、泰伯と至徳、周徳と至徳が同等であることを示す。

日漢とも「泰伯、其可…」「周徳、其可…」と読むが、そうするとこの其は何であろうか。

○子其勉之、吾不復見子矣（左成16）キミよ、キミはね、しっかりやりなさいよ

○昭王之不復、君其問諸水浜（左僖4）主君よ主君はね、それを川岸に問え。諸＝之乎、之於

○爾其無忘乃父之志（欧陽修、漢文入門156）お前はね、乃父の志を忘れるなよ

○非神敗令尹、令尹其不勤民、実自販也（左僖28太田98）令尹自身が、彼こそ

三—23　子語魯大師楽曰楽其可知也已　音楽というものはね

七—22　子曰天生徳於予、桓魋其如予前、桓魋ごときがわが身をどうしようぞ（金谷）　那框魋将把我怎様？（楊）

九—5　天之未喪斯文也、匡人其、如予何　匡の連中（者ども）ごときとて

六—6　子謂仲弓曰犂牛之子騂且角、雖欲勿用、山川其舎諸　川山〔の神〕とてそれを捨てておこうか

以上主語に後付される其は、そこで停頓することにより、後続の述語との区別を明確にするとともに、いろいろ微妙な意味を添加するもののようである。

(二) 副詞語尾の其　前詞に後付する助詞

論語には述語としては、何如、如之何。（どうでしょう）を用いるが、句中で副詞となるときは一般に其を後付する。

五—18　子曰、臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也　いかんぞ其れ知ならん（金）

イカンゾソレと訓読されているようだが、この3字は、イカンゾ—どうして—の意の副詞。其は「何如」に後付された音調助詞であろう。

十三—9　哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何、有若対曰、盍徹乎、曰二、吾猶不足、如之何其徹也　これを如何ぞ其れ徹せんや（金）

前の「如之何」は述語で、そこで切れる。之をいかんせん、と読む、〔それを〕どうしたものだろう。句中で副詞になると其が後付される。之をいかんぞソレと読む外はないのだろう。意味は、どうして徹ができようぞ。

十六—7　子路従而後…君臣之義、如之何其可廃也

君臣の義は、之をいかんぞ〔其れ〕廃棄すべけんや—どうして廃棄できよう。也、は疑問語気

十九—3　子夏之門人…我之大賢与…我之不賢与人将距我、如之何其距人也。之を如何んぞ、人を距がんや、どうして人を拒むことができよう。

我大賢与　われ大賢なるか、我不賢与われ不賢なるか、はともに独立句であるが、主語と述語の間に之が入ると、「我れが大賢だとすれば」と、より大きい句の部分に転化する。（参看：之の(一)）

—25　…其生也栄、其死也哀、如之何其可及也。之を如何んぞ〔ソレ〕及ぶべけんや、どうして企及できよう—とても及びようがない。

十一—22　子路問、聞斯行諸、子曰有父兄在、如之何其聞斯行之也、冉有問、聞斯行諸、子曰聞斯行之、公西華曰由也問、聞斯行諸、子曰、有父兄在、求也問、聞斯行諸、子曰、聞斯行之、赤也惑、敢問、子曰、求也退、故進レ之ッ、由也兼人、故退レ之リ

進・退・は自動詞、賓語をとると使役義となる。之を使動構造という。名詞、形容詞も往々自動詞にはたらく。　之ヲ進ム、進マシム。之ヲ退ク、退カシム。

如之何が副詞になるために其音を後付する。

聞斯行諸が4見、聞斯行之が3見する事実から見ても、如之何、其聞斯…でないことは明らかである。

十三—20　子張問、士何如斯謂之達矣。　如何なれば之を達と謂う可きや　士はどうすれば、彼を達人と謂えるのだろう。

何如は述語、それが副詞になるために斯音を後付。謂は双賓の系詞—之を達と謂う。可は助動詞。

三—20　子貢曰何如斯可謂之士矣。…使於四方不辱君命、可謂士矣。　…何如にせば之を士う謂う可きや　どうしたら士と謂えるだろうか。

この2例から論語では矣を疑問語気にも用いることがわかる。可謂士矣の謂も系詞。

十四—37　子曰莫ニ我ヲ知ルモノ一也夫、子貢曰、何為其莫知子也、　何んすれぞソレ子を知るもの莫きや

どうして先生を理解する者がいないのでしょう。皇侃云…何為猶若何也。「其」字に言及しない。何為其は三連詞の副詞。莫は一般に無～者、（没有～的）だが無（没有）と同用のこともある。

漢文大系…莫ニ我ヲ知ルヲ也夫

何ゾ為ニ其レ莫ニシト知ルヲ子ヲ

漢文大成…何すれぞ其れ子を知ること莫きや

岩波：我を知ること莫きかな
何為れぞ其れ子を知ること莫からん

十三—15　定公問、一言而可以興邦有諸、孔子対曰言不可以若是其幾也、人之言ニ曰ヲ為君難、為臣不易。如知為君之難也、不幾乎一言而興邦乎。曰一言而可以喪邦有諸。孔子対曰、言不可以若是其幾也、人之言曰予無楽乎為君、唯其言而楽莫予違也、如其善而莫之違也、不亦善乎、如不善而莫之違也、不幾乎一言而喪邦乎。

「言は以て是くの若くなるべからざるも、其れ幾きなり（金谷）」と二句にはどうしても読めぬのではないか。必ず新註のように一句に読むべきだろう。—言は〔一言になどと〕そんなにきっぱりとは言い切れぬものなんだ。

若是其かくのごとく〔其レ〕—そんなに。唯其ただ〔ソレ〕、如其もし〔ソレ〕、はみな副詞で、其はその語尾であろう。この場合其音が付かないとコトバが滑らかにならない。読むとすればソレと読む以外はなかろうが。莫予違、莫之違、代詞賓語（予、之）が莫と違の間に入るのは文言文法の特例。

九—6　太宰問於子貢曰、夫子聖者与、何其多能也…なんぞ〔其れ〕多能なるや　なんとまあ多能なのだろう

—感歎副詞。

十三—3　子路曰、衛君待子而為政、子将ニ（マサ）奚先ニセン（ナニヲカ）ト（何を先にされるお考か）子曰、必也正名乎、子路曰有是哉、子之迂也、奚其正　なんぞ〔其れ〕正さん—どうして〔名などを〕正すことがあろう。奚其は疑問副詞

六—26宰我問曰、仁者雖告之曰井有仁者焉、其従之也（この其レは軽い疑惑副詞）子曰何為其然也…なんすれぞ〔其れ〕然らんや…どうしてそんな事をするもんですかね

以上諸例の「～其」はみな前詞に後付された音詞で、それ自体には意味はないが、いろいろなニュアンスを

含蓄するもののようである。訓読としては上詞につづけては読み難いが、書かれている文字はすべて読むという方針を貫くためには、やはり従来通り「～其レ」と読む外はないのかも知れない。

副詞語尾の其は現代語にも往々用いられる：其を後付し複音にすることにより語調をととのえる。

惟其淡也就…ただ（准風月105）　自然更其淡不到…さらに（南腔北調集170）　倘其果然…もしも（同　121）　倘其没有（同　129）　可以択歴来極其特別的人物…きわめて（准風月105）

疑惑副詞

其、は一詞でも疑惑詞としてよく疑問句に用いられる。前例：其従之也サア之に従うでしょうか、の其。それから

一―2　有子曰…不好犯上而作乱者未之有也、君子務本、本立而道生、孝弟也者其為ニ―仁之本一与カ。

集註：与、平声。とは動詞ではないということ。与（歟）には問詞と語気と両用あるが、いま疑惑を表わす語気詞。

其については注疏を始め古来その解釈をしたものがない。いま軽い疑惑を表わす或は断定を憚る副詞で、言葉を滑らかにするための音調性をも兼ねる。…孝悌というのは、さあ〔恐らく〕仁の本であろうか―多分そうだろう。

集註「仁を為すの本」と読むと孝悌と本とを結ぶ動詞がなくなる不安がある。（為字の無い本があるそうだが、為が無ければ「仁を為す」は成り立たない。為を系詞とするのが文法に合うように思われる）孝弟也者＝為―仁之本…　孝弟というのは仁の本である）主系（系賓）構造。

未之有也は未有之也の倒置形。否定述語の賓語が代詞のときは、動詞の前に倒置するのは文言文法の特例、今までに二、三回指摘した。未はイマダ…ズと再読する。

一―15　子貢曰貧而無諂、富而無驕何如。子曰可也…子貢曰、詩云、如切如瑳如琢如磨、其斯之謂与。…其レ斯レヲ之レ謂フカ
其レ斯レヲ謂フカ
其レ斯ノ謂カ　　之を読まないのも、之をノと読むのも、ともに非。
之字は意味はないが強調の助詞だから「何ノ陋カ之レ有ナン」の之をコレと読むのと同様に、必ずコレと読む

二―22　子曰…大車無輗、小車無軏、其何以行之哉。其れ何を以て、之を行らんや―一体どうやって車を動かすのだろうか。

六―6　子謂仲弓曰、犂牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其レ舎シヤ―諸ヲ（舎之乎）…其れこれを捨てんや―山川の神がさあそれを捨てるだろうか。

十一―19　子曰回也其庶乎、屢空…回や其れ庶きか。…回はまあ〔理想に〕近いのだろう（金谷）。

十三―12　子曰片言可以折獄者其由也与…其れ由なるか

八―20　舜有臣五人…孔子曰才難、不其然乎…其れ然らずや　そうでないだろうか

十五―5　子曰無為而治者其レ舜ナル也与カ　さあ舜だろうか

これらはみな句末に疑惑語気レ乎、也、与、が用いられている疑問述語だから其の疑問副詞であることは無理なく成立つであろう。

八―19子曰大哉…蕩々ト乎シテ民無能名焉、巍々ト乎シテ其レ有成功也、煥ト乎シテ其レ有文章。

この2其はソレと読むが、処動構造の主語であろうか。其＝有―成功（文章）…そこには堂々たる成功があ

り、輝やかしい文章（礼楽制度）がある。

十四—14　子問公叔文子於公明賈曰、信ナル乎カ、夫子不言不笑不取乎。公明賈対曰、以告者過也、夫子時然後言、人不厭其言也、楽然後笑、人不厭其言也、義然後取、人不厭其取也。子曰、其然、豈其然乎。

其は疑惑副詞、其は豈に後付された音詞。

訓読はみな「其れ然り、豈に其れ然らんや」だが、これでは、この2句はつづかないのではないか。「其れ然らんや、豈に其れ然らんや—さあ然うだろうか、まさに然うではあるまい」と読訳すべきでないか。

楊伯峻157頁：孔子道：如此的嗎？難道真是如此的嗎？が正しい。「其然乎、豈其然乎」では乎が重さなるから、上の乎を略した形であろう。八—20に「不其然乎」の語がある。

○城上有烏、斉師其レ遁ルカ（左伝・呂氏虚字10）

斉師は逃げたのだろうか、恐らく逃げたのだろう

以テ告グル者ノ過也と読むのは疑わしい。以字が浮いてしまう「告ぐる者の過てるを以て也（前言のような誤解が起きたのは）告ぐる者の話し方が間違っていたから（以）である」。たまたま楊氏「訳註」に以、代詞、此也。例証可参考楊遇夫先生的「詞詮」。とあるが、この「以」を「此」と解釈するのは注疏文法の欠陥「望文生義」の好個の一例。絶対に従うことはできない。公羊伝から始めて今日只今まで中国学者には、前後矛盾や理の通らぬ解釈が少なくない、必ず原典に就いてその文法を追究すべきである。

之

之はユクという動詞を除き、代詞賓語（之ニ、之ヲ、之ヨリ）、名詞と名詞をつなぐ連詞（〜ノ〜、仁之本）な

どは誰にも理解し易いから、ここでは主語と述語をつなぐ連詞と、強勢助詞だけをとりあげる。注疏は曽て之を解釈しない。

㈠　句中で主語と述語をつなぐ

この時は、その句をより大きい句の中の一つの語に変える役目を果す。…ノと読むが、〔主語〕が…の意味である。

一―15　子禽問…夫子之求之也、其諸異乎人之求與。…夫子が之を求めるのは、人が之を求むるのと異なるのであろうか、多分…異なるのであろう。其、は疑惑副詞。

其諸について楊氏訳註7頁：洪頤煊讀書叢録云：『公羊桓六年伝「其諸以病桓與」閔元年伝「其諸吾仲孫與？」僖二十四年「其諸此之謂與？」宣五年伝「其諸為其双双而俱至者與？」十五年伝「其諸則宜於此焉変矣」其諸是斉魯間語』。案、総上諸例、皆用来表示不肯定的語気。黄家岱旗藝軒雑著説「其諸」意為「或是」大致得之。…「或はそうかも知れぬ」ノ疑惑を表わす副詞。ということらしい。

一―16　子曰不患人之不己知　人の己を知らざるを患えず　人が己を知らぬのを…

人＝不知―己　人は己を知らず、は独立の動賓構造句であるが、之が主述の間に挿入されると「人が己を知らぬということ」となり、不患という動詞の賓語に転格する、これが之の効用、この場合、句末に「也」字を付けて停頓するのが普通。否定動詞の賓語が代詞のときは否定詞の後、動詞の前に移るというのが文言文法の一の特例：不知己―不己知

三―5　曰夷狄之有君不如諸夏之亡也

①夷狄＝有―君　②諸夏＝亡〔―君〕はともに独立の処動構造だが、之が主語の下に入ると①はより大きい主

系構造の主語となり、②はその賓語となる。全句は「主語①＝不如―賓語②」という主系構造

三―24　①君子之至於斯也。…②天下之無道也久矣…

①君子＝至ル―於斯ニ（動賓句）之が加わると「君子がここに来た時は」という状語になる。

②天下ニ＝無シ―道（処動句）之が入ると、天下に道徳が行われなくなってから久しい。

主語＝之―述語也が、より大きい句の部分の諸語になる例は古今の文章に無数に表われる。現代文では之が的に替り、停頓詞也を去る。

㈡　強調の助詞　必ずコレと読む

二―6　孟武伯問孝、子曰父母ハ唯其疾ヲ之憂フ

憂―疾…の賓語「疾」を強調する為め動詞の前に倒置し、強勢助詞「之」を添加する。

唯其の其は副詞語尾…タダ〔其レ〕（参看：後付の其㈡）

九―14　…子曰君子居之、何陋之有　何の陋か之れ有らん

―32　…子曰未二之ヲ思ハ也夫レ何ノ遠キコトカ之レ有ナン哉　何の遠きことか之れ有らんや

十九―22　…而亦何常師カ之有ラン何の常師か之れ有らん

これらはみな何（なんの）という疑問強調の定語が加ったために賓語が動詞の前に提きあげられ、そのしるしに助詞「之」が添加されたものゆえ必ずコレと読む。以下同じ

十八―5　…曰鳳兮鳳兮、何ゾ徳ノ之衰ヘタルヤ也

強調の助詞だから必ずコレと読む、単に「何ぞ徳の衰えたるや」では之は連詞となり、そういう句は成り立

たない。

十一―10　顔淵死、子哭レテ―之ニ慟ス…子曰有慟乎、非ニ夫人之為レ慟一而誰為慟。この人のこれ為めに慟するに非ずして―この人の為にこそ慟せずして…

小川・西田「漢文入門」（岩波文庫）24頁は「コレを読み込むと国語を乱すから読まなくてもよい」というのは非。（金谷もコレを読まない）

(イ)文面に書いてある文字は原則として全部読むべきものゆえ、コレを読まぬなら「夫人之為メ」となり、連詞に紛れるが、この句では之の連詞は成り立たない。(ロ)コレと読まなければ強勢語気「こそ」を表わすことができない。何の陋かコレ有らん、何の常師かコレ有らん、のコレと同格の之である。(ハ)漢文という外国文の直訳が訓読なのだから、訓読は始めから国語らしくない、この場合だけを「国語を乱す」と言うべきでない。

(二)本来は為タメニ／夫人ノ為メニ慟ス（六―4に冉子ニ為タメニ／其ノ母ノ為メニ請フ―粟ヲの語がある）であるべきだが、いま「夫人」を強調するために「為」動詞の前に提きあげ、そのしるしに「之」を添加したものゆえ、必ず「夫の人の之れ為めに」と読まねばならない。

誰為慟は為誰慟の誰が疑問賓語なるが故に動詞「為」に先行した形。

十一―24　季子然問、仲由冉求可謂大臣与、子曰吾以子為異之問、曾由与求之問…　吾れ子を以て異なることをコレ問うと為す、曾ち由と求とをコレ問う（金谷）

もと問―異、問―由与求、とすべきところ、賓語を強調の為めに動詞「問」の前に倒置し、そのしるしに之を挿入したもの故必ずコレと読む。異ヲ之レ問フ、由与求トヲ之レ問フ

奇異、奇怪なことを問うものだと思ったらないんだ、由と求とのことを問うているのか。

孔安国曰謂子問異事耳、則此二人ヲ之レ問、安足為大臣乎。皇侃云曾猶則也。朱熹云曾猶乃也。スナハチと

読む、今の陳・楊両氏は曽の解釈をしない。この異事を日本では「別のこと」「他のこと」と訳すのは恐らく非。楊氏が別人と訳すのも非、奇妙なこと、ヘンな事と疑惑が起きなければ強調助詞之が入る餘地が無いし、後句の曽にもつづかないのではないか。この曽は今の原来、敢情、に相当し、予想に反した現実にぶつかった時に発する副詞である。

岩波文庫竹内義雄訳註「論語」一三九頁「異をしも（之）問う…さあらで（曽）由と求とのことをしも問えるか」は文法にぴったり。

吾＝以―子＝為―異之問は遞述構造（＝符2見）子、は以、動詞の賓語で、為、動詞の主語を兼ねるから兼語という。…子を以て…問うと為す、と読むが「以～為」を合わせて「思う～謂」と訳す方が便捷であろう。

十一―23　…子曰吾＝以―女＝為―死矣　吾れ汝を以て死せりと為す…わしはお前が死んだと思った（遞述構造）

使動構造（述語が一つの単述句）

自動詞は一般に賓語をとらないものだが、それが賓語をとると使役義になるということは漢語文法の一つ特性で、日語にはないから注意を要する。

十一―9　顔淵死、子曰噫、天喪予、天喪予（天＝喪セシム―予ヲ）天、予を〔沮〕喪せしむ

天、予をほろぼせり（ほろぶ自動、ほろぼす使動）と読むが、その意は「ああ、われ意気沮喪せり、がっかりしてしまった、残念至極」

喪ほろぶ、沮喪する、懐喪する、喪心する（がっかりして気力が無くなってしまう）という自動詞が賓語をとると、予を沮喪せしむ、がっかりさせる、という使役義になるが、予から言えば―われ沮喪せり、われ喪び

たり、がっかりした、ああ残念！

顔氏家訓に人は悲痛の極、天を呼ぶという意味のことがある。この天はいま旻天に愬える意を兼ねているのだろう。

何晏集解：天喪予者若喪己也（天喪予とは己をうしなうがごとし）、再言之者痛惜之甚也。

集註：喪去声（とは喪失義の他動詞）噫、傷痛声、悼道無伝若天喪己也（道の伝わるなきは、天の己（孔子）を喪うが若きを悼む也）。

解・註とも喪を喪失義に解するがそれでは文義不通になってしまう。

注疏は曾て原文を時言（その時の口語）に飜訳しないが、それ故に往々解釈を誤る。楊伯峻「論語訳注」119頁に至て始めて現代口語の飜訳を見付けた：

顔淵死了、孔子道：咳！天老爺要我的命呀！天老爺要我的命呀！

論語のこの章を読む毎に魯迅「阿長与山海経（朝花夕拾所収）の語を想起せざるを得ない。

論：噫、天喪予、天喪予　レ天、予を沮喪せしむ

魯：呵呀、駭死我了、駭死我了　レ我を駭死せしむ　レわしを死ぬほど驚かす　レわしは死ぬほど驚いた　レびっくり仰天した。

あちらではショッキングな感情は古来使動構造で表現するものらしい。痛惜の甚しさを表わすのに再言するのも日本人の表現法と異る。日本人は悲痛の極には却ってモノを言わないのではないか。

三―24　儀封人…従者＝見―之ヲ　之をまみえしむ

十六―7　子路…丈人＝…止―子路＝宿、（子路を止めて宿らしめ　レ遞述致使式＝符2見）殺雞為黍而食ハシメ―之ニ（子路に食わしめ）見ユシム―其二子ヲ焉（二人の子供をまみえしむ　レ面会させた）

五—26　顔淵季路…子曰老者、安ンジ—之（之をやすんじ、安からしめ）、朋友信—之、少者懷—之（之をなつけしめん）

六—26　宰我問…君子可逝（ユカシム）也、不可陷（ラシム）也　不・可とも助動詞（動詞の前の動詞は助動詞）

十三—25　子曰君子易事而難説（よろこばしめ難し）説之不以道（之をよろこばすに道を以てせず）…、小人難事而易説也（よろこばせ易し）

十一—22　…子曰求也退ク、故進マシメ—之ヲ、由也兼人、故退（カシム）—之ヲ

進む、退くは、自動詞、いま賓語「之」をとって使動となり之を進ませ…退かすと言うべきところ、訓読は使動の意を含んだまま、簡潔に「進む、退く、」と読んでもいい

七—30　陳司敗問…孔子退ク、揖巫馬期而進マシメ—之ヲ曰…前の方へ進ませる—来させる）

吉川博士「古典について」144頁が「之を進（マネ）いて」と、他動に読むのは恐らく非。

文法は生成性 generative であるとは同じ表現構造には同じ読訳が成り立つということに外ならないから。

十一—22…由也兼人、故進之を之をまねくとは読めない。

文体　漢語には使役表現、受身表現が甚だしく多いということがその特色の一つだが、動詞だけで使役や受身を表わす方法は日本語には絶えてないから、こういう日漢表現の相異は学生によく理解させて置く必要がある。

使

㈠　他動詞　常に賓語を伴う

一—5　子曰…使フニ—民ヲ　以テス—時ヲ　民を使うル動賓句、以時は補語

二—19　定公問：君＝使—臣、臣＝事—君、如之何。君は臣を使い、臣は君に事う…
いま問は情意動詞で、：以下の3句がその賓語。
使臣、事君、は「他動詞—賓語」で最もありふれた動賓構造であり、その例文は枚挙に勝えない。（本稿の最初にも二、三見）

六—4　子華＝使ム—於斉ニ　レ斉に使す
賓語が処所である印に介詞「於」を前置する。

十三—5　子曰…授之以政不達、使ヒシテ—於四方ニ不能専対…

十四—26　蘧伯玉使人於孔子…人を孔子〔の処〕に使わす、使いにやる。使はいま双賓に活用。前賓（人）と後賓（処所）とを区別するために於を挿入。
人を孔子に使せしむと読むも可。

（二）　助動詞「使（セシム）」　動詞の前の使は助動詞　助動詞＋動詞

六—1　子曰雍也可＋使＋南面　雍や南面せしむ可し。可も助動詞

—8　季康子問：仲由＝可使＋従—政也与…　賜也可使従政也与…求也可使従政也与…

文体　この章は3問3答ともそれぞれ同類述語の重畳で、日語には殆んど見られない表現形式。

五—8　孟武伯問…子曰由也千乗之国、可使＋治—其賦也…可レ使レ為ニ之ガ宰ヲ也…可使与賓客言也…為之宰の之はいま指示定語

文体　この章も同類の問答述語が畳出する

八—9　子曰民＝可使＋由—之、不可使＋知—之　不、も助動詞、助動詞は累加できる：可使…なども

七―31　子与人歌而善、必使反―之…必ず之を反復せしめて

十一―13　子曰聴訟吾猶人也、必也使＋無―訟乎　必ずや訟え無からしめんか

八―11　子曰如有―周公之才之美、使＋驕且吝、其餘不足観也矣

この使はシメパと読むが「もし…ならば」の意である。後世の縦使、即使、仮使、などに相当し「せしむる」意味は消滅するもののようである。金谷「もし傲慢で物おしみするようなら」、前後文を読みつげば使役義の有無は判定できるだろう。

文体　こういう使役表現も日語にはない。

㈢　遞述構造の前動詞　～をして～せしむ

前述語と後述語が兼語を軸にして遞結する複述句を遞述構造という。

前述語が、使・教・令・などでなくとも使役義になるから、単述の使動構造と区別して、遞述のものを致使式という。前動詞（使・教・令・其他の他動詞）を再読しないのが合法である。兼語は前動詞の賓語であると同時に後動詞の主語を兼ねるから兼語という。＝符が2見する

三―21　哀公問社…周人以栗、曰〔周人＝〕使―民＝戦栗也…〔周は〕民をして戦栗せしむるなり

前述…周＝使―民　周は民を使う〻動賓構造

後述…民＝戦栗也　民は戦栗す〻主動構造

前述と後述を兼語（民）を軸にして遞結すると自然に「民をして戦栗せしむ」という使役義になる。

五―6　子＝使―漆雕開＝仕　漆を〔つかわ〕して仕えしむ

九―12　子疾病、子路使門人為臣　子路は門人をして臣たらしむ

十一―25　子路使子羔為費宰　子羔を〔使わ〕して費の宰為らしむ

―22　…子曰挙直錯諸枉、能ク＋使シテ―枉者ヲ＝直ナラシム

諸は之乎（之於）の合成語

四―6　子曰…惡不仁者其為仁矣、不＋使シテ―不仁者ヲ＝加ヘシメ乎―其ノ身ニ

其は疑惑副詞（きっと、多分）であろう

遡述の致使式は前動詞が「使」でなくとも、後述語が動詞であれば（兼語式であれば）使役義になるということを注意する。例えば

十六―7　子路從而後…丈人＝止メテ―子路ヲ＝宿ラシメ（遡述致使式）殺雞、為黍、（二つの動賓述語）而食クハス―之ニ、見マミエシム―其ノ二子ヲ焉（二使動述語）

子＝…使シテ―子路ヲ＝反リテ見マミエシム―之ニ（遡述致使式）

(イ)止子路宿は使子路宿に替えることができる。

ただ使は使役義を表わすだけで「とどめる」義を表わすことはできない。

(ロ)いま子路を兼語とする遡述構造が自然に使役義を発生するので、前動詞が「止」か「使」かには全く関係がない。ただ遡述致使では前動詞に「使」を用いるのが圧倒的に多いので、後世の学者は「使」によって使役義が発生するもののように錯覚しているのである。

(ハ)止メテ―子路ヲ＝宿ラシメ　とシメを後動詞に送るのが合法である。当然、使子路宿・使子路反見之、のときもシメは「宿」又は「見」に送るべきで、「使」をシメと再読できないのは、「止」「反」を「止メテ～シメ」「反リテ～シメ」と再読することが出来ないのと同断。漢語人はむろん如何なる文字も再読することはない。

(二)太守＝即チ遣（ツカハシテ）―人ヲ＝隨ヒテ―其ニ（漁人）住キ、
尋（キシム）―向（サキニ）所ヲ十誌（セシ）

も後述動詞「往」か「尋」かにシムを送り、「遣」を再読することはできない。

(ホ)太田辰夫氏「中国語歴史文法」242頁が止子路宿を兼語句でないというのは、構造分析の不備による錯覚であろう。（子路が兼語）

(ヘ)丈人＝止子路宿、殺雞、為黍、而食之、見其二子焉

この句は主語「丈人」に五つの述語がある。このように複数の述語が並列する句を連述構造という。その一つ一つの述語は何構造であってもかまわない。たまたまこの句は一遍述、二動賓、二使動だけれども。

論語には連述構造は無数に出て来るが煩わしいからここには引かない。

受動構造

さきに賓語をとるべきでない自動詞が賓語を伴うと使役義を表わす使動構造（単述句）になると言ったが、今度は賓語を伴うべき他動詞が賓語をとらないと受身を表わす受動構造になるということは、よく文法の対応性を示すものである。

九―7　牢曰子云、吾不試、故藝　こころみられず

鄭玄曰…試用也、言孔子自云我不見用故多能技芸也

「試みる」が直ちに「用いる」意になる訳ではないが、鄭玄は試みが他動詞であることを強調したいので、その頃誰でもよく用いた他動詞「用」を充てたのであろう。用は現代語でもよく他動詞として用いられる。い

ま他動詞「試」の後に賓語がないから、主語「吾」にはたらきかける、吾が受身の主体となる〜吾が用いられずレわしは世間から試用されなかったから、いろいろのことを習わざるを得なかったレいろいろのことを覚えたのである。

受動構造では主語が常に動詞のはたらきを受ける主体即ち「受事」〜受動者である。

四—26　子游曰、事君数（シバシバスレバ）斯（コヽニ）辱（シメラル）矣、朋友に、しはしば〔注意〕すれば斯に疏んぜられる、君に〔何遍も諫言〕すれば、〔その人が〕はずかしめられる〜恥辱をうける。

斯、は則（れば則ち）に相当する連詞性副詞で、論語に多見。

五—2　子謂、南容〈邦ニ有レバ—道〉不＋廃（セラレ）

国に道が行われている時には、南容は廃せられない〜用いられる。

南容が不廃の主体である。この点からも「子謂フ—南容ヲ」と句切るのが誤であることが証明できる。

賓語を伴わない他動詞が受身を表わす用例は少なくないが、これ以上は引例しない。

系賓構造

系詞が主語と賓語（述語ではない）の中間に介在して両者が同格であることを表わす構造。

主語は賓語である、又は賓語と同格である意味を表わす。

「是」系詞は一般に現代口語専用と考えられているようだが、それが二千余年前の論語に已に現われているということは重要な意義を示唆するものゆえ、ここで主としてその例文をとりあげる。

「是」はコレ〜ナリと読み、「主語は賓語〔と同格〕である」意味を表わす。

一―2　有子曰…孝弟也者、其＝為―仁之本与　レ其は仁の本であるか　この為は是の文語で文言によく用いられる系詞。「孝弟」と「仁之本」とは同格。為、が系詞だとすれば、集註「為仁猶曰行仁」説は成り立たない。

四―5　子曰、富与貴＝是―人之所欲也…貧与賤是人之所悪也…　富と貴とは是れ人の欲する所なり、所のものである

七―23　子曰二三子＝以―我＝為―隠乎（これは逝述で以は前動詞、為は後動詞だが、以為2字を合わせてオモフと訳す方が簡便レわしが隠くしていると思うのか）…吾無所行而不与二三子者＝是―丘也　何でも君らと一緒にしないことはないというのが、〔この〕丘なのだ

～者と丘とが同格。是が入ると主・賓の区別が明確になる。

古文では「～也」「～者也」で、系賓構造は成り立つのだが、いま2例とも曰語即ち口頭語である、口語では主語と賓語との区分を明確にしたいので是を挿入したのであろう。このことから論語の時代も口語では一般に是系詞を常用したのではないかと推測される。

2例の是は従来のように前文を承けた代詞という解釈も可能だが、系詞とする方がより自然のように思われる。下例は必ず系詞。

六―6　**論語の原文**　　**楊伯峻の訳文**

長沮曰夫執輿者為誰　誰ですか　　那位車駕子的是誰

子路曰為孔丘　孔丘です　　子路道：是孔丘（為も系詞）

曰是魯孔丘与。　魯の孔丘ですか　　又道：是魯国的那位孔丘嗎

曰是也　そうです　　子路道：是的

桀溺曰子為誰　　子は誰ですか　　桀溺道：你是誰

曰為仲由　　仲由です　　子路道：我是仲由

曰是魯孔丘之徒与。　　…徒ですか。　　…道：你是魯国孔丘的門徒嗎

対曰然　　さよう　　答道：対的

問詞「与」で終結する句には「是」を、「誰であるか」には「為」を用いているが、両者はともに系詞だから「是也」以外の是は為に代替できる。

「馬氏文通」巻一「両是皆為決辞」とは是を系詞と認めているのだが、現代の文法家は却て馬氏を黙殺しているようである。黎錦熙「比較文法」94頁「上是指代、下是然否副詞」は合法とは思われない。黎氏は是を系詞とは呼ばず、同動詞と名づける。

十六—1　季氏将伐…孔子曰求、無乃爾是過与。（爾＝是—過　与なんじが過っているのではないか）…亀玉毀於櫝中＝是—誰之過与。（誰の過失であるか）

十三—30　子曰以不教民戦、是＝謂—棄之レ是を之を棄つと謂う。いま謂が系詞で、是（主語）と棄之（賓語）とが同格であることを示す

十五—30　子曰過而不改、是謂過矣　是＝謂—過　是を過と謂う

右2例の是は前文を承けた代詞主語、謂は現代語の叫做レ称為に相当する系詞〜を（は）〜という、と呼ぶ、と称する。結局は主語と賓語は同格ということである。

十一—17　季氏富於周公而求也為之…子曰非吾徒也　…〔求＝〕非—吾徒レ求は僕らの仲間ではない、非は是の否定形レ不是

十四—18　子貢曰管仲非仁者与。　レ管仲＝非—仁者レ管仲不是仁者嗎

…管仲は仁者に非ざるかレ仁者でないか

十三—1　顔淵問仁…子曰非レ礼勿レ視（礼でないもの、礼に合わないものは、視る勿れ）非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動…

十一—3　徳行ハ顔淵、〜、仲弓、言語ハ宰我、子貢、政治ハ冉有、季路、文学ハ子游、子夏。…文学は子游、子夏である。

このようにグループの分類をするような時には、主語の下に直ちに複数の賓語名詞を並列することがあるが、これは系詞の無い系賓構造と認められる。もう一例

十八—8　逸民ハ伯夷、叔斉、……柳下恵、小連、…

主表構造

人・物・事の性状を描写する述語は形容詞又は形容詞性の語句であるから、動詞のある述語と区別して表語と呼び、主語に表語の配合した句を主表構造という。＝符は主語と表語述語を分ける。

一—1　子曰、学而時習之＝不亦説乎　またよろこばしからずや、は表語、レ主表構造

一—2　有子曰、其為人也＝孝弟而好犯上者：鮮矣　すくなし、表語。いま述語が、また主表句

三—19　定公問：君使臣、臣事君、（以上二句が主語）＝如之何　どうしたものでしょう　…主表構造

—20　関雎ハ＝楽而不淫、哀而不傷　…述語は二表語

十—1　孔子＝於／郷党〜恂々如也　…主表句

似—不能言者　…系賓句　（似、は系詞）

其＝在宗廟朝廷ゾ便々ゾ言　…主動句（ゾの前は副詞語）
唯謹爾。…表語

十一―2　侃々如也、〜如也〜如也、与与如也　…みな表語

十五―7　子曰、直哉＝史魚（直なる哉史魚）　…君子哉＝蘧伯玉
感歎句ではこのように主語と表語が倒置されることが多い〜史魚ハ＝直ナル哉

十八―8　我＝則異於是、無可無不可　…表語が二つ並ぶ連述句　則はいま副詞
異於、は同於、と意味は反対だが、我と是とが同格であることを示す系詞である点は同じ。

十九―16　曾子曰堂々乎張也　…堂々たるかな　張や　…主・表倒置の感歎表現

二十―3　寛　（表語）則得―衆ヲ　…動賓句
信　（表語）則民＝任ズ焉　…主動句（自動詞）
公　（表語）則民＝悦ブ　…　主表句（表語）

二―12　子曰君子＝不器　…主表句とすべきだろう

主動構造

主語に自動詞の配合した句を主動構造という。自動詞は句中でよく用いられるが、独立の主動句は極めて少ないし、他の構造と紛れることは殆んどないから、ここでは一二を挙げるに止める。

十八―3　斉景公曰、吾＝老矣、不能用也（2表語）　孔子＝行ナル　孔子は行ってしまった…主動句

十八―4　斉人…季桓子＝三日不朝　三日間朝せず　…主動句

二―15　子曰、学（自動詞）而不思（自動）則罔（表語）、思（自動）而不学（自動）則殆（表語）。

一―2　有子曰…本＝立、而道＝生…（2主動）

一―6　子曰、弟子＝入則孝、出則弟　…入・出は自動詞、孝・弟は表語

動詞には、用・殺、のように必ず他動するもの、死のように必ず自動するものもあるが、自・他両動するものが甚だ多い。句に於ける構造形態を見れば、自動か他動かは明確に判別出来る筈である。概して言えば主語と動詞だけで意味のまとまるものは自動詞、賓語を必要とするものは他動詞。

何以〻賓語―為　（〻の前は副詞）

十三―8　棘成子曰…①何以文為。…何ぞ文を以て為さん（金谷）

①
漢文大系　何ぞ文を以て為ん
漢文大成　何ぞ文を以て為さん
拙：　何を以て文を為さん―どうしてカザリなんかするのか。…何以2字を一つの副詞とみる。

十六―1　季氏将伐…季路見於孔子曰…是社稷之臣也、②何以伐為（岩波本は何以為伐也）
孔安国曰已属魯為社稷之臣、何用滅之為也。…何を用て（副詞）、之を滅ぼすを為さんや。

③
漢文大成　何を以て伐を為さん
漢文大系　何を以て伐たん（拙：為を読まぬのは非）
岩波（金谷）何を以てか伐つことを為さん…　どうして攻めたりするのか
楊伯峻　这便是和魯国共安危存亡的藩国　為什麽要去攻打它呢

ここで何以2字を一副詞とするのは、前例で「何ぞ文を以て」と分隔するのと一致しない。

(イ)①②は同一構造だから同じように読むべきである。①を「何ぞ文を以て」②を「何を以て…」と両様に読むのは不可。

(ロ)何以は孔安国の何用、現代語の為什麽、幹什麽、に相当する疑問副詞だから「何を以て」とつづけて読む。どうして、なぜ、の意。

(ハ)本来は①何以為文②何以為伐〔也〕とすべきところ「何以」という強勢の疑問副詞に押されて、動詞と賓語を倒置したものと思われる

①何を以て文を為さん
②何を以て伐つを為さん　　と読むべきだろう。

(ニ)為が、賓語に後置されるのは句首に疑問副詞が現われる場合に限られ、文為、伐為、と賓動に倒置すると強調の語気が出るものと思われる。この文法は六朝あたりまでで亡びたようである。

②のように賓語が「伐つ」という動詞のときは為（なす）動詞と重複し、為が無用の蛇足となるので自然に脱落し、後世は「何以伐也」形に落着くのである。①は「何以為文」と正順の形に復する。

十三―5　子曰誦詩三百…使於四方不能専対、雖多亦奚以為　またなにを以て為さん…何の役に立つだろうか。

亦は音詞

③奚以ヲ、は何以と全く同じ疑問副詞、③は為の前に賓語が無いだけ。

句末の為を清の王念孫が語助と解釈して以来、現代の文法学者、康熙字典、辞源もすべて助詞というが、この句は奚以が副詞だから、為が無ければ成り立たない。為、は句が成立するために必須不可欠の述語動詞であり、助詞ではあり得らい。（参看：拙「漢語形体文法論」五三九―五七二）

また

七―18　葉公問孔子於子路…（集註：葉、舒涉反ショウ。楊：旧音摂セツ）

葉をエフ・ヨウと読むことは、昔から無学の子女でも誰でもみな知っているのに、何故わざわざ音を注したかといえば、楚のこの地名に限りショウと読めということに外ならぬ。例えば日本で迦葉に限りショウと読むのと同じ。集註がこんなやさしい文字に音を注したのはそういう意味である。セフ・ショウ又はセツ音が例外であることを教えているのである。

ところが日本の学者が、唐宋から現代に至るまで中国人の葉姓にみなショウ又はセツと仮名をつけているのは甚だしい誤解ではないか。現に中国では、木の葉でも人姓でも楚の「葉公」を除いては、葉字はすべて逸捷切 yeh エフ　ヨウと読む。

説文：草木之葉也…枼声。エフ

集韻：枼弋涉切　エフ

宋鄭樵通志氏族略：葉氏旧音摂、後世与木葉之葉同音